『比較民俗研究』10. 1994／9

研究ノート

喫茶習俗に於ける油茶・擂茶
―飲と食の境界―

松下　智※

まえがき

喫茶という生活文化が，長い歴史を経て現在に至るには，中国に原形をもつ喫茶習俗が世界各国，各地の民族に受容され，それが様々に分化変容しながら，それぞれの民族文化を育てて来たからである。こうした喫茶習俗の原形と思われるものの一つに，中国の華中から華南に分布する油茶・擂茶がある。この習俗が，喫茶として飲み物の範中になるか，あるいは，食べ物としての範囲に留まるものかについての精査は，今後の研究成果に期待したい。

一方，この油茶・擂茶が，日本文化としての茶道文化に必修の抹茶の成り立ちとも深いかかわりをもっていることを提起する研究者もある①。ここに，そうした油茶・擂茶の実態を明らかにし，生活文化としての喫茶習俗について，日・中の比較文化の立場から若干の考察を行うものである②。

（一）油茶・擂茶のつくり方

油茶のつくり方

中国の湖北省，湖南省，広西壮族自治区，さらに，貴州省等，華中西部地方の主として，土家族，侗族，瑶族，さらに，苗族等の少数民族の間に見られるもので，一部漢族にも，こうした少数民族との同居地域に見ることが出来る。

油茶は，この地方のこれら諸民族には，日常生活に見られる，ケの飲食物であり，来客とかお祭り等のハレには，用いる具の種類が多くなる。

油茶をつくるには，日常料理のの鉄鍋を熱して，食用油を溶かし，熱した油で「もち米」を炒ることから始まる。もち米が黄色味を帯びた頃に，「落花生」を加えて更に炒る。落花生が黄色味を帯びた頃に，食用油を加えることもある。食用油は，その地方によって異なり，落花生，菜種油，油茶油等が使われている。もち米と落花生が黄色に炒られた頃に茶の葉を加え，茶の葉が鍋の中で広がった頃に「しょうが」を細かく砕いて加える。こうして一分内外炒ってから「お湯」と「塩」を少々加えて煮る，この時，必ずお湯を使うわけで，水を使うと一瞬鍋の温度が下がり，油茶の味が落ちる。お湯を加えて一分内外煮沸しながら，撹拌する。茶色を帯びた薄緑の油茶が出来あがる。これを茶こしで漉して「茶がら」に油と少々の塩とおゆを加え，再び煮る。この操作を三回繰り返し，三回の油茶を併せて，濃度を調節し，味や香を調整する。

油茶には，原料となった油分，塩分，しょうが等が，加わっており，栄養的にも不足ない飲みもので，特に冬期の寒さには最適の飲みものとされている。用いられる茶の葉は，主として中下級のものが使われており，日常の飲み物として活きている。飲む時にも具の類は無く，油茶湯そのものであり，お客には，三杯飲むのが礼儀となっている。油茶にもハレのものがあり，それには飲む時に具が多くなっている③。

擂茶のつくり方

擂茶の習俗は，油茶の分布よりはるかに狭く，現在は，湖南省西部の湘西地方常徳地区「桃花源」と同地区「安化」④，さらに，広西壮

※社団法人豊茗会会長

族自治区東部，柳州地区北部三江侗族自治県に伝承されている[5]。

湖南省常徳地区，安化県の擂茶には，上級茶が使われているが，茶樹の新芽の萠える時期には，生の茶の芽を使う。茶以外の材料として，落花生の生の豆と製品の豆，胡麻の生と炒ったもの，胡椒，生姜，そして塩が使われる。そして，これをつくる道具として「擂鉢」と「擂棒」が使われる。

生姜の細目切りに始まり，これを生の落花生と共に，擂鉢で擂りつぶす。これに生の胡麻を加え，茶の葉にお湯を少しくわえたもの，続いて胡椒，それに，水を少々二回に分けて加える。この間に擂鉢の方は一時も休むことなく，材料が擂り合されている。水が加わって多少粘気が出て来た頃に，炒った落花生，胡麻を加えてさらに擂る。次いで塩を少々加え，水を少し加えて擂り続ける。最後に参加人数分のお湯を加えて撹拌する，以上で擂茶が出来あがる。

擂茶を茶碗に移して，米ものを擂茶に浮かべて食べるが，古くは「とうもろこし」なども炒ったものが使われていた様である。さらに，擂茶の茶菓子として，「清塘」，「大福」，「仙渓」，「梅城」，「居郷」などが出される。これ等の茶菓子類については，その時のお客によって，あるいは，催事の性格による等で，種類にも増減があり，一定のルールは無い様である。

いずれにしても，擂茶は日常的でなく，珍客の来訪，あるいは年中の大きな行事等，ハレのものであって，毎日飲むものではない。さらに，擂茶には米の炒ったものが加わり，落花生や胡麻などと組合わされ，飲み物と云う範囲を越えた姿になっており，食べ物に近いものとなっている。ここに油茶との違いを見ることが出来る。

（二）油茶・擂茶の分布

貴州省

貴州省には，苗族をはじめ布依族，侗族，彝族等十種類余の少数民族が住んでいる[6]。

油茶の習俗については，侗族，苗族について認められており[7]，瑤族に於いても，打油茶の習俗のあることが認められている[8]。

これら油茶の習俗は，主として貴州省東部の湖北省，湖南省との境界地に接する地方に住む，苗族であり，侗族である。貴州省西南地方に住む苗族[9]や，東南地方に住む，苗族や瑤族には油茶は，認められない[10]。同じ東南地方でも，苗族や侗族の多い地方には，油茶も認められる[11]。

苗族は，貴州省に多いが，その分布域は，四川省，雲南省，広西壮族自治区等に分布しており，さらに，タイ国，ミャンマー，ラオス，ベトナム等東南アジアの内陸部に広く分布しているが，油茶の習俗については，貴州省東部地方に住む苗族に集中している。

湖北省

湖北省の油茶の習俗については，主として湖北省西部の四川省，貴州省，湖南省等の境界地域「鄂区」に住む土家族をはじめ，苗族，侗族に見られる[12]。土家族には油茶の習慣は伝統的な習俗として，鄂西地方の「恩施県」を中心として，「宣恩県」，「利川県」等に伝承されているが，湖北省北西部宜昌地区の「長陽土家族自治県」に住む土家族には，認められない[13]。

土家族の油茶の習俗も，苗族と同様に地域差の有ることが明らかである。

擂茶については，現代の湖北省には認めることは出来ないが，「蘇東坡」の詩中に，擂茶の味わいが，具体的に記録されており，当時の湖北省北部に伝承されていたことが，明らかである。

恩施県の東部「五峰山」に住む，土家族の油茶の造り方は，次の様である。

豚の脂肪肉を炒って，油をとることから始まり，この油をもって，具に使う材料を揚げる。具には，普通米，もち米，大米鍋粑，落花生，クルミ，米粉，大豆，それに，とうもろこし等があり，これらを順次，豚の油でから揚げする。ここで，油を造り変えるが，この時は，細の目に切った豚の脂肪肉で油をとり，残った脂肪肉は，出来あがった油茶と一所にして食べる。

新たに出来た油で，胡椒，胡麻，にんにくを順次入れてカラ揚げし，それに塩少々と茶の葉を入れ，一分程煮沸してから，水を参加人数分だけ入れ，撹拌しながら五～六分煮る。出来あがった油茶に「分葱」などを香草を入れて出来あがりとなる。全行程の終了までの所要時間は約三〇分を要する。

各自の茶碗に分注した油茶は，前述のから揚げした具の総べてが入り，油茶を飲むというより，完全に食べることになる。こうした油茶は，珍客のもてなしや，年何回かの行事等ハレのものであって，毎日飲む油茶には，具の種類も少なく，行程も省略されている。

さらに，土家族には，擂茶の習慣は過去，現在ともに認めることは出来無い様である。

油茶のつくり方
（湖北省恩施県五峰，土家族）

湖南省

湖南省に於ける油茶の分布は，湖南省西部の湘西土家族苗族自治州を中心として，広東省及び広西壮族自治州を中心として，広東省及び西壮族自治区，さらに，貴州省等の境界地域に集中している。これらの地域には，土家族，苗族をはじめ，侗族，瑤族，そして少数ながら壮族もすんでおり，漢代以来の「武陵蛮」あるいは，「長沙蛮」といわれて来た，蛮の呼称で扱われて来た民族であった。

油茶・擂茶に関しては，瑤族，侗族に多く見られるわけで，侗族は，湖南省，広西壮族自治に多いが，他の地域には多くは居住しない。瑤族については，武陵山を起点として，広東省，広西壮族自治区，雲南省，さらに，ベトナム，ラオス，タイ，わずかながらミヤンマー等東南アジア山地にまで分布している[15]。油茶・擂茶についても，広西壮族自治区に多く認められており，瑤族とのかかわりの深いことを示している。

一方，武陵山は古くから茶の山地として知られており[16]，とりわけ「安化県」は，清代から民国時代に至る頃には，中国最大の茶産地として知られている[17]。この安化県には，「梅山蛮」と呼ばれた，瑤族の居住地であったわけで，瑤族が安化の茶産地の主要民族であったことが推測できる[18]。

さらに，現在も伝承されている，安化の擂茶の習俗及び桃花源の擂茶，それらもかつてこの地方に住んでいた瑤族の習俗ではなかったか，と見られる。かつて，瑤族には，食べ物は総て一所にして食べる習慣があった様で[19]，茶の利用もこうした習慣から，油茶や擂茶の様にして，茶以外の穀類なども一所にして食べていたのではないか，と推測している。

湖南省南部の，城步苗族自治県[20]，新晃侗族自治県[21]，通道侗族自治県[22]等には，油茶の習慣が認められているが，主要民族としては，苗族，侗族となっているが，この地方には瑤族の分布もあり，これら諸民族のなかに油茶の習俗が継承されていることが明らかである。

湖南省南部の藍山県には，…「一日酵糟或用油茶…取茶荈油煬之，入薑煮水。雑拌花生

米花，飲之謂可驅瘴気…」とあり，油茶の効用まで認められている[23]。湖南省内各地に住む瑤族と油茶の擂茶の有無を示す適確な資料は，未調査であり，今後の調査でより，明らかになるものと思われる。

瑤族の住む所には必ず油茶・擂茶が認められるわけでなく，湖南省南端の江華瑤族自治には，泡茶の習慣は一日たりとも欠かせないが，油茶の習慣は認められない[24]。それは，その地方の社会的，地理的，民族的，あるいは，経済的等々の諸条件によって，生活習慣は変化，適応するわけで，油茶・擂茶の有無も有り得ることは当然であると見ることが出来る。

広西壮族自治区

湖南省の西部，武陵山に住んでいた瑤族は，主として明代前後に大きな移動を繰返しており，清代から民国時代にかけて，広西壮族自治の各地に定着したことが推せられる[25]。

広西壮族自治区は，文字通り主要民族は，壮族であるが，次いで瑤族が多く，壮族同様同区の略々全域に分布している。この他に，苗族，彝族，毛難族，仫佬族，回族，京族，水族，そして，仡佬族等の少数民族が[26]，住んでいるが，油茶・擂茶の習俗には，殆ど見ることは出来ない。

広西壮族自治区東部の桂林地区に住む瑤族は，主として過山瑤族で盤瑤が多く，各地の瑤族に油茶が見られる。すなわち，富川県瑤族自治県をはじめ，恭城県，興安県，臨桂県，賀県，竜勝各族自治県，それに，荔浦県[27]，等々である[28]。柳川地区にあっては，三江侗族自治県に，擂茶の習俗のあることが，侗族に認められている[29]。

柳川地区には，融水苗族自治県もあり，苗族が多くすんでいるが，油茶の習俗については明確な資料は見出せない。

広西壮族自治区西部の百色地区の瑤族には，各地に油茶の習俗が認められており，西部の西林県[30]，百色市[31]，田林県[32]，さらに東隣の河池地区では，都安瑤族自治県[33]，等に継承されている。

これら油茶・擂茶の習俗は，各地の瑤族の移動と共に招来したものとおもわれるが，これらの歴史的なかかりについては，それを明らかにする資料は見出せない。

桂林南方40～50キロにある，平楽県には，油茶製法に関して，材料としての生老薑，落花生，それに，上等粗茶があり，油茶をつくる器具として，「小杵臼…杵以堅木爲之臼或木或石可以木瓢代瓦檑鉢（即沙鉢）亦可。小鐵鍋…煎炒原料…」とあり，油茶と擂茶が明らかな区別のない様な造り方を示している[34]。

現在の平楽県には，瑤族は多くない様だが明，清代頃には，山間地に多く住んでいたことが推測されるわけで，彼等の日常生活には，油茶も擂茶も活かされていたことがうかがえる。

さらに，柳州地区の東部山間地の金秀瑤族自治県には，茶山瑤族をはじめ，盤瑤，花藍瑤，坳瑤，山子瑤等が住んでおり[35]，山間地を活かして茶業も盛んで，とりわけ盤瑤族の造る，「白牛茶」は，中国でも幻の名茶と呼ばれている[36]。これら各種の瑤族には喫茶の習慣はあるが，油茶も擂茶も見られず。各民族共々生活の場により，それぞれの適応があって，伝統的な喫茶習慣も変容したのではないかと思われる。

広東省

広東省の少数民族は，主として北西部山間地に瑤族が多く，わずかながら瑤族，そして，広東省東部の潮州市東北部の山間地に，「畲族」が住んでいる。

現在の各地少数民族には，油茶・擂茶の習俗は見られないが，潮州市北方の大埔県の畲族に油茶の習俗が見られる様である。

韶州府志には，広州市北方の英徳県の習俗として，「…日用飲食之外珍寄之貨不售焉村落客至相欵用油茶下茶物皆油煎[37]」。とあり油茶に

用いる茶は，下級の茶を利用していたことが伺える。英徳県山間には，清朝末期頃まで瑤族が住んでいたわけで，油茶の習俗も，こうした瑤族とのかかわりも推測出来る。

広州市から北方70～80キロにある，清遠県は，名茶「清遠茶」が，筆架山を中心に生産されている。「…清遠地方の人々は特別に飲茶を好む。人々は毎日茶を飲まないでは居られないほどである。この地方の飲茶方法は他の地方飲茶方法と違っている。…それは一種の「擂り茶」ともいうべき飲用法である。茶を盆か乳鉢の中に入れて，木の棒か槌でそれをすりつぶし，それを湯の中に入れて茶渣が沈澱して後，これを飲むといった方法である[11]。県城区と濱江，琶江の各地では茶と共に胡麻や落花生や果実の皮などを一緒にすりつぶして飲む。…[38]」とあり，前述の通り各地の油茶や擂茶の習俗と大差ない清遠県の筆架山あら山間地にかけては，瑤族の住んでいたことが明らかであり[39]，当時の習俗が継承されていたことが推測される。

現在，広東省に住む瑤族は，広州市北西部地方の連南瑤族自治県[40]をはじめ，乳源瑤族自治県，連県，連山壮族瑤族自治県，さらに，楽昌県曲江県等に分散している。これら各地には，山間地の利を活かして，各地に名茶が造られているが，油茶・擂茶の習俗はみることが出来ない。

福建省

福建省の擂茶の習俗は，福建省西部地方に集中しており，宁化県，長汀県，泰宁県，そして，建宁県にあり，そのつくり方等は，湖南省の安化の擂茶と大差ない。この地方は，明代頃には畲族の居住地であり，その後，畲族は東部の武夷山方面へと移住している[41]。したがって，この地方の擂茶の習俗は，かつてこの地方に住んでいた，畲族の伝えたものではないかと推測されるが，それを明らかに出来る資料は見出せない。

もともと，畲族は関東省東部へ移住して来た山地焼畑農耕民族，すなわち，瑤族であり，それを漢族が見て「畲族」と呼ぶ様になったもので，畲族の生活習慣をはじめ，生業，儀礼，宗教等は，瑤族のそれと共通性が高い。したがって，湖南省西部の武陵山に起点をもつ，瑤族の移動の一行程に定着した習俗の一つと見ることが出来る。

福建省は，広く知られる様に，烏竜茶の主産地で，閩南地方の「安溪県」の鉄觀音をはじめ，閩北の武夷山系の各種烏竜茶，さらに，閩東地方の紅茶生産等，畲族とのかかわりが深く，瑤族の茶と同様に畲族と茶のかかわりも伝統的な生業の一つになっていることが明らかである。

生業としての茶は継承されているが，油茶・擂茶の習俗は欠落しており，生活習慣の変容を示している。

考　察

飲と食の境界

油茶と擂茶は，基本的に見ると茶の葉をそのまま油で炒るのと，茶と具を混合して粉末に擂りつぶすところが異う。そして，油茶は下級茶を使い，毎日飲むところの日常的なものであるが，擂茶は年何回かの祭日か，特別の来客時につくるのが中心で，前者が“ケ”のものであり，後者は“ハレ”のものということが出来る。

したがって，擂茶には上級茶を使い，新芽の萠る時期には，茶の生の幼芽を使い，各種の具を混合して，祭りを祝い珍客のもてなしを行っている。こうした実態を見ると，油茶も擂茶も飲み物でなく，食べ物の形態をもっているということが出来る。

いずれにしても，茶の葉を利用することには変わりなく，茶の葉を利用するからには，茶の木の生育が基本となる。茶の木が自然に育つ条件は，産地の標高500～1,000メートル内外の山間が適地となっている。茶の利用は，

人の手によって造られ，人によって飲まれるわけで，茶の木が自然に育つ山間地に住む民族によって，茶の利用が始まったことが考えられる。茶の木が，自然に育つ山間に住み，それを利用する民族として各地に見られるのが，瑤族であり，瑤族と茶のかかわりの深いことが，それを物語っている。

しかし，瑤族が，茶という植物を探し出すには，本草思想の知識を必要とするはずで，その本草の思想知識は漢族のもつ神仙思想があり，こうした本草の思想が深いかかわりをもっているのではないか，と推察される。山地に住む瑤族が，平地に住む漢族との交換経済，共存共栄が武陵山地域で発生したものと見ることが出来る。それは，現在の瑤族畲族の分布域における茶産地は，必ずといえる程漢族の多い消費地があり，その周辺山地に，彼等の生活圏があることである。

漢族から，茶の葉の利用価値を学んだ瑤族は，瑤族の伝統的な飲食形態に取り入れ，茶の葉を日常生活の食べる方法に取り入れたものである。かつての瑤族には，主食も副食も混合して食べる習慣があり茶の葉もその一環として，落花生，胡麻，ショウガ等，日常生活や薬草的なものまで混合して用いたことが考えられる[42]。これら食品を茶と混合して，しかも擂りつぶすことにより，無駄なく利用すると共に，香味も倍加することになるはずである。

こうした，茶の利用方法から見て，茶の葉を草板に飲む，という現在の飲茶習俗以前のものではないか，と考えるが，中国に於ける実態調査が，未完成であり，それを適確に示すことは出来ない。各地の瑤族について，茶のかかわりを見る時，他の民族に見られない広範な茶の利用，かかわりをもっているわけで，瑤族に茶の初原的な姿を見ることが出来るわけである。

油茶・擂茶の習俗と民族

現在，油茶・擂茶の習俗は，武陵山を中心として，その周辺地域に分布しており，歴史的にもそれが裏付けされる。したがって，油茶・擂茶の習俗は，武陵山に住んでいた民族に，その根源のあることは，容易に推測出来るわけで，とりわけ，瑤族には油茶・擂茶の習俗が歴史的にも，地理的にも深いかかわりをもっていることが推察出来る。

瑤族の族源は，華中の長江流域にあったといわれているが，歴史上に記されるのは，武陵山であり，武陵蛮，長沙蛮，零陵蛮等であり，梅山蛮といわれて来た民族である。主として標高500～1,000メートルを中心とする山地で，焼畑耕作を行い，生業の主体が山間地の産物にあり，その産物を平地の漢族その他の諸民族との交換経済で，共存共栄の関係を保持しながら生活している。そして，その生業の中には，茶や薬草，林産物等が，焼畑耕作と共に継承されている。

もちろん，瑤族の総てが山地に住むわけでなく，平地に定着し，水田耕作を生業の中心としている瑤族もいるわけで，油茶・擂茶も同様に現在は，そうした習俗の欠落した地域もあるわけで，武陵山からの距離に正比例している様に見られる。

瑤族（畲族）と茶の関係について見ると，湖南省を始めとして，広東省，福建省，広西壮族自治区，雲南省，さらに，ベトナム，タイ等の，東南アジアの山間地等に住む，瑤族（畲族）には大部分に茶の産地があり，しかも，中国茶の中でも屈指の名茶としての名声を得ているものもある。もちろん，茶の生産には無関係な瑤族も多いわけで，過去に移動した場所によって大きく変わっており，広西壮族自治区の金秀瑤族自治県では坳瑤が名茶「白牛茶」を造っているが，その地に茶山瑤，盘瑤，花藍瑤，二子瑤等が住んでいるが[43]，茶の生産にたずさわるのは，盘瑤が自家用程度で，生業としての茶は見ることが出来ない。

茶の生産には，自然条件をはじめ，経済的，社会的条件等多くの要因があり，自家用の茶を造って飲む程度のものならば，自然条件さえ揃えば造れるが，経済作物としては，各種要因が揃わないと成り立たない。瑤族には，生業としての茶が成り立たなくとも，自家消費の茶を畦畔などに植えており，新入植地で茶の木が間に合わない所では，近隣の市場などから製品を入手して飲んでいる[44]。こうして，自給，購入は別として，喫茶の習俗は，瑤族全体に共通しており，来客には先ず“お茶を一杯”ということで，お茶を飲むことから何事もスタートしているといっても過言ではない。

広東省の連南瑤族自治県には，盤瑤と排瑤が住んでおり，盤瑤は山間地に茶などを生業としており，名茶「黄連茶」などが造られている。一方平地部には，排瑤が水稲耕作を主体に生活しているが，山間地に住む排瑤にも，茶の生産が生業の大きな存在となっている[45]。

連南瑤族自治県の瑤族には，油茶・擂茶の習俗は見ることが出来ないが，一般的な喫茶の風習は欠かせないものになっている。

さらに，広西壮族自治県の桂林地区，富川県瑤族自治県の山間地に住む，盤瑤には油茶の習俗が伝承されているが，平地瑤には見られない。また，同地区の荔浦県に住む盤瑤は，薬草採りをもって生業の主体としているが，喫茶の習慣は勿論のこと，来客には油茶をもって接待している。

瑤族には，喫茶，油茶・擂茶の習俗以外に，婚姻儀礼に茶が不可欠の所もあり，広東省の連南瑤族自治県，広西壮族自治県の富川瑤族自治県，福建省の閩東の畲族等に確認されており，瑤族と茶のかかわりが，飲料としての生活物資以外に，儀礼的な慣習の中にも活かされており，伝統的な深いかかわりを想起出来る。

瑤族の儀礼的な茶の関わりについては，宋代？の『坤元録』に，湖南省中部の辰溪県と溆浦県境にある「無射山」に住む人達の生活に，茶が結婚に欠かせないものとなっていることが記されている[47]。無射山は現在の羅子山ではないか，と推測されるが，現地訪問は実現していない。

瑤族は，苗瑤語族として同族の位置にあるが，苗族の茶に関しては，瑤族と大きな違いがある。

苗族は，貴州省を中心として，その周辺地域から，東南アジア山地等に広く分布しており，湖北省の鄂西の恩施地区，湖南省の湘西土家族苗族自治州，広西壮族自治区融水苗族自治県等々の主要民族となっている。斯くして苗族は，中国の西南から東南アジア山地に広く分布するが，茶とのかかわりは，瑤族や侗族に比較して見ると，極めて浅いことが明らかである。

近年になって，新中国の民族政策，経済開発に伴っての茶業開発は見られるが，伝統的な民族的かかわりは認められない。湖南省西部の「古丈県」では，名茶「古尖毛米茶」が造られているが，土家族を中心としたもので，苗族も参加している程度である。さらに，貴州省の「黔東南苗族侗族自治州」でも，近年の経済開発に伴う，茶の生産が苗族によってなされている[48]。同州南部の「黔南布依族苗族自治州」にも苗族による茶の生産は，近年のもので，伝統的には，ここに住む瑤族であり，油茶の習慣も，侗族や瑤族には見られるが，苗族には認められないか，まれに見るだけである[49]。

また，貴州北部の「務川仡佬族苗族自治県」には，油茶の習慣は仡佬族に見ることが出来るが，苗族には見られない[50]。

苗族は日常の喫茶習俗の欠落は，来訪者に對しても，茶をもって迎えることなく，主として酒をもって迎える。さらに，水かお湯をもってお茶代わりになる所もあり，喫茶の習慣が伝統的に欠落している。このことは，東南アジア各地に住む苗族にも共通しているこ

とである[51]。

同じ苗族でも，武陵山及びその周辺に住む苗族には，喫茶の習慣，油茶の習俗も見ることが出来るわけで，これらは，武陵山に於ける，瑤族や侗族との日常生活に於ける交流の結果ではないか，と考える。

侗族の油茶・擂茶については，周達生[52]や黄貴才[53]の細部に渡る調査報告があるが，侗族以外の民族に関しては多くふれていない。

侗族は，苗族や瑤族の様に，その分布範囲は広くなく，武陵山を中心とする，その周辺地域で[54]，茶に関しては，油茶・擂茶もあり，各地に茶産地も形成しているが，瑤族程ではない。

侗族も瑤族，苗族，土家族共々，武陵山にその族源が求められる様で，武陵蛮の一族とされている。侗族はその族源は，傣族の系譜であり，本来的には平地の稲作民族であり，それが山間に入り，稲作耕作と共に山間の利を活かして，林業や茶業などの山の活用に特技を生み出して来た様である。

したがって，山地に原産した茶に関しては伝統的に山地生活をもって，生活の場として来た瑤族との関係で，茶が取り入れられたものではないか，と推測する。しかし，油茶・擂茶に関しては，各地の侗族に認められており[55]，民族としての分布範囲は，瑤族より狭いが，その頻度においては，瑤族に劣らない[56]。

油茶・擂茶の習俗に於いては，瑤族と大差ないが，茶の生産や産地形成に於いては，瑤族に，各地に名茶の生産があり，中国茶業開発の原動となっているが，侗族にはそれが少ない。

茶業生産において侗族は，瑤族より少ないが，林業に関しては，瑤族に劣らぬ開発，発展を見ることが出来るのではないか，と思われる。侗族の「風橋」や，「鼓楼」の建築技術を見ると，林業や木材加工への技術は，並々ならぬものがあるのではないか，と推察される。

土家族は，湖北省西部の「長陽土家族自治県」の長陽人遺跡が物語る様に，族源の地が，長陽県にある様である[57]。現在は，湖北省の西部，鄂西地区の恩施県を中心として，宣恩県，鶴峰県，五峰県，さらに，湖南省西部の湘西土家族苗族自治州，一部は四川省東部，貴州省東部，南部を分布しており，武陵山を中心にその周縁地域に多い。瑤族，苗族，侗族と同じく，武陵蛮，長沙蛮等の構成民族であり，巴蜀の古代民族ともいわれているが，新中国成立までは，民族としての扱いを受けることなく，漢族として扱われていた人達が多かった様で，今では著しく漢族化が進んでおり，土家族としての民族的特性は，殆ど見ることが出来ない。

土家族の茶に関しては，武陵山に先駆的な表現もあり，各地に茶の産地があり，恩施県の「玉露」の様に中国には，例を見ない茶を造っている。恩施県の「玉露」は，蒸し製であって，日本の玉露製法と変わらない。こうしたところから，日本の玉露は，恩施から伝えられたものという人もあるが，細部を見ると，昭和14年に，静岡県の茶業界有志が，湖北省に製茶会社を設立しており，その年から玉露の生産が始まっている。したがって，日本の製茶技術をもって，恩施地方に継承されていた，蒸し製法に改良が加えられた結果のものであることが明らかである。

湖北省西部地方には，三国時代の張輯の著といわれる『広雅』に蒸し製法の技術があり，団茶を造っていたことが明らかである。その蒸し製法の伝統が，現在にも継承されており，湖北省の西部，宣昌地区の「当陽県」にある名刹「玉仙寺」に伝えられており，さらに前述の恩施県地方にも伝統的な製茶法として，伝えられていたものである。こうした伝統的技法のある所へ，日本からの製茶法が導入されたことになるのである。

この地方の土家族は，各地に特産としての茶が多く，貢茶として代々献上されていた様

である。土家族に於ける現在の製茶法は，前述の蒸し製法と，一般的な釜炒り製法であり，瑤族の様に変化に富んだ製茶法は見ることが出来ない。このことは，土家族は瑤族の様に各地に移動することなく，武陵山周縁に集中していたからで，漢化も進み，製茶法なども漢族のそれを早くから導入して来たからであろう。

喫茶習俗に於いても，油茶の習俗はあるが，擂茶の習俗は見ることが出来ないし，同じ土家族でも，長陽県では，油茶の習慣もない[58]。

思施県の五峰山に住む，土家族の油茶は，前述の如く，具も多く，ハレのものとなっており，侗族などの擂茶に匹適するが，擂茶ではない。土家族には，油茶の習俗のみであって，擂茶の習俗は継承されていないことを物語っているわけで茶の利用については，瑤族のもつ原初的な要素に欠ける。

さらに，土家族には婚姻儀礼に於ける，茶の利用は認められず，茶の利用としては，ここにも茶が欠落している。

こうした茶の実態を見ると，土家族には過去に著しい漢化の時代があり，茶の製造や油茶・擂茶は，瑤族や侗族のものであって，土家族の生活には受け入れられななかったのではないか，と推測される。それが，瑤族の移動によって，茶の産地も放置されていた所へ，土家族の入植によって，再開発されたものであり，茶の利用面でも，油茶の習慣が簡便なものであることから，土家族にも取り入れられたもので，ハレの時には，油茶に具を多くしていることになったと考える。

喫茶法の分化

喫茶法の原初的な姿を明確に，証明することは不可能であるが，『茶経』[59]には，茶に落花生やショウガ等混用するのは，茶の価値を無にすることになる，ということが記されており，これは，油茶・擂茶に見る具の混用が，武陵山地方に伝わっていた，喫茶の習俗を指しているとも考えられる。『茶経』の著者である「陸羽」は，湖北省の省都，武漢と西部の中心都市，宜昌との略々中間地点の天門県に育っており，武陵山方面の事情は，荊巴の文化として，茶に関しては細部にわたって入手出来たはずである。

周達生氏は，擂茶が，日本の抹茶の原形である様に報告されており[61]，日本の茶道文化史に新たな見地を提起している。

擂茶と抹茶については，茶の葉を粉末にすることについては，共通性を見出すことが出来るが，擂茶の原点は，茶を飲むのでなく，食べるという，茶の葉を使って日常生活の料理に活かすという原点を見ることが出来る。そして，それの簡略化されたものが，油茶であり，ハレの姿で現在に継承されているものと考える。

一方，抹茶については，その原点は仙薬的な薬用としてのものであり，貯蔵，保存などの爲に，蒸した茶の芹を搗いて，団茶に造っている。団茶に造って遠方への輸送が便利になり，漢族の多い都市へと運ばれたものである。

そして，その団茶を微粉末にして，薬用として飲んだものである。したがって，擂茶と抹茶では，その利用目的が出発点に於いて異なり，その製法にも大きな違いがある。

一方見方を変えてみると，擂茶は「食」の分野であり，抹茶は「飲」のものであり，それもその原点は，薬用にあるといえる。

したがって，擂茶の粉末から，抹茶へと変容することは，製茶法から見ても不可能である。現在の抹茶製法を見ても，一たん煎茶に造ったもの，例えそれが，玉露の様な上級茶であっても，それを抹茶に造ることは出来ない。ただ物理的に粉末にすることは出来ても，それが抹茶としての効果をもたらすことは，不可能である。

しかし，擂茶も，抹茶の前行程となる団茶の行程から全く別途，茶の葉を分離して，そ

れを団茶に造ることは，可能である。現に擂茶にも，茶の若芽を具と一緒に擂りつぶしているわけで，この若芽を使って，団茶に造ることは出来るわけである。こうした見地に立つと，擂茶と抹茶への団茶の前後関係が，問題となるが，茶の利用を山地民族から得た漢族が，それを団茶に造り薬的な粉末の茶として利用した。それを山地民族であった，瑤族，侗族等が，漢族との交流の中に見て，自分達の生活に取り入れたのが，擂茶であり，それの簡略化されたものが，油茶として活かされたものでないか，と推測する。

油茶，擂茶共に，揉捻することは，後世の明代初期頃からのものであり，油茶・擂茶の発生時期が問題になるが，擂茶には時期的には茶の芽の幼芽を直接利用することもあるわけで，ここに，擂茶の発生時期を見出すことが出来る。油茶については，そうした擂茶の簡略化されたもの，すなわち，“ケ”のものとして後世に発生しているのではないかと推測する。細部にわたる調査研究により，その実像が明らかになることを，今後に期待したい。

おわり

茶という植物は，中国雲南省南部から，中部洞庭湖周辺山地にかけて，自生したもので，その茶が漢族の漢文化による，仙薬的な効用をもって，薬用として効用が認められ，中国国内をはじめ，日本へも抹茶として招来されている。一方，武陵山の山地民族には，日常食の形態で受け入れられ，飲食の境界におかれて継承されて来たもので，それが，油茶であり，擂茶であると推察される。

したがって，日本の抹茶は擂茶からの変容ではなく，出発点が異なるわけである。出発点は異なっても，お茶のもつ薬用的効用，そして，日常性としての，もてなしの心に於いては，日・中はもちろんのこと，両国共通性をもつものへと発展している。そこに茶のもつ大きな特性，意義を見出すものである。

こうした，薬用的効用，日常性といった物質文化は，その産地，時代，社会情勢，経済効果等により変化し易いが，茶のもつもてなしの心，人生儀礼的な精神文化に取り入れられたものは，容易に変えることなく継承されている。ここに茶のもつ大きな特性を見出すことが出来る。

そうした見地から見て，茶は人が造り人が利用するものであり，民族とのかかわりを無視することが出来ない。茶に関する民俗的な研究は，日・中両国ともに極めて少なく，ましてや比較民俗的な研究は皆無に等しい。お茶という日常飲料への比較民俗としての研究の深まることを心より期待する者である。

引用文献

①『中国の食文化』周達生，創元社，一九八七年。

②「東アジアにおける喫茶法－その比較民俗的研究序説－」，松下智，『比較民俗研究』六号，筑波大学比較民俗研究会，一九九二年。

③広西壮族自治区，賀県調査，松下智，一九八六年九月。

④『中国名茶の旅』，松下智，淡交社，一九八八年。

⑤「油茶とその周辺」周達生，淡交社，一九八二年。

⑥『貴州的少数民族』貴州民族研究所編，貴州人民出版社，一九八〇年。

⑦「浅淡侗族油茶和日本茶道的同源関係」，黄貴才，貴州民族研究，第三期貴州民族研究所，一九八七年。

⑧『中華民族風俗辞典』唐祈彭維金主編，江西教育出版社，一九八八年。

⑨『黔西南布依族苗族自治州概況』同上編写組，貴州民族出版社，一九八五年。

⑩『黔南布依族苗族自治州概況』同上編写組，貴州民族出版社，一九八五年。

⑪『黔東南苗族侗族自治州概況』同上編写組，

貴州民族出版社，一九八六年。
⑫湖北省鄂西地区調査，松下智，一九九〇年四月。
⑬湖北省宣昌地区調査，松下智，一九九四年四月。
⑭『中華茶書』青木正兒編譯，看秋社，一九六二年。
⑮『ヤオ族の歴史と文化』竹村卓二，弘文堂，一九八一年。
⑯『中国華南民族社会史研究』岡田宏二，汲古書院，一九九三年。
⑰『清代社会経済史研究』，重田徳，岩波書店，一九七五年。
⑱『ティーロード』日本茶の来た道，松下智，雄山閣出版，一九九三年。
⑲『湖南省綜覧』神田正雄，海外社，一九三九年。
⑳『城步苗族自治県概況』同上編写組，湖南人民出版社，一九八四年。
㉑『新晃侗族自治県概況』同上編写組，湖南人民出版社，一九八五年。
㉒『通道侗族自治県概況』同上編写組，湖南人民出版社，一九八六年。
㉓『藍山縣圖志』巻十三，中国方志叢書，一六禮俗篇，城文出版社，民国二二年。
㉔『江華瑤族自治県概況』同上編写組，湖南人民出版社，一九八四年。
㉕ 前掲 ⑮
㉖『広西壮族自治県概況』同上編写組，広西民族出版社，一九八五年。
㉗『広西瑤族社会歴史調査』第三冊，広西壮族自治区編輯組，広西民族出版社，一九八五年。
㉘『広西瑤族社会歴史調査』第四冊，広西壮族自治区編輯組，広西民族出版社，一九八六年。
㉙ 前掲 ①
㉚『広西瑤族社会歴史調査』第五冊，広西壮族自治区編輯組，広西民族出版社，一九八六年。
㉛『広西瑤族社会歴史調査』第五冊，広西壮族自治区編輯組，広西民族出版社，一九八六年。
㉜ 前掲 ㉛
㉝ 前掲 ㉛
㉞『平樂縣』巻二，中国方志叢書，成文出版，光緒十年。
㉟『金秀瑤族自治県概況』同上編写組，広西民族出版社，一九八四年。
㊱ 広西壮族自治区，金秀瑤族自治県調査，松下智，一九八八年三月。
㊲『韶州府志』全，風俗，中国方志叢書，第二号，成文出版社，清同治十三年。
㊳「中国大公報」一九五五年二月十五日号。
㊴ 前掲 ⑱
㊵ 広東省，連南瑤族自治県調査，松下智，一九九二年六月。
㊶『畲族簡史』同上編写組，福建人民出版社，一九八〇年。
㊷ 前掲 ⑲
㊸ 前掲 ㊱
㊹ 雲南省，西双版納，思茅地区調査，松下智，一九九四年一月。
㊺ 広東省，連南瑤族自治県調査，松下智，一九九三年二月。
㊻ 広西壮族自治区，荔浦県調査，松下智，一九九二年十一月。
㊼『茶経表釋』全 諸岡存，出版科学総合研究所，一九四一年。
㊽
㊾『貴州瑤族』柏果成，史継忠，石海波，貴州民族出版社，一九九〇年。
㊿『務川仡佬族苗族自治県概況』同上編写組，貴州民族出版社，一九八五年。
(51)『インド支那研究』東南アジア稲作民族文化総合調査報告(一)，松本信廣，養賢堂書店，一九六五年。
(52) 前掲 ①
(53) 前掲 ⑦
(54)『侗族簡史』同上編写組，貴州民族出版社，

一九八五年。
⑤⑤「民族文化」一九八三年一月。
⑤⑥「民族文化」一九八六年六月。
⑤⑦『長陽県志』同上編纂委員会，中国城市出版社，一九九二年。
⑤⑧ 前掲 ⑪
⑤⑨『茶経』前掲 ㊼
⑥⓪ 前掲 ⑤
『民族食俗』李東印，四川民族出版社，一九九〇年。
『中華民族飲食風俗大觀』世界知識出版社，一九九二年。
『湘西土家族苗族自治州概況』同上編写組，湖南人民出版社，一九八五年。
『中国少数民族風情録』范玉梅他，四川民族出版社，一九八七年。
『湖南方物志』清・黄元驥，馮天亮・李竜如点校，岳麓書社，一九八五年。
『西南中国の少数民族』鈴木正崇，金丸良子，古今書院，一九八五年。
『苗族社会歴史調査』(一)(二)(三)，貴州省編輯組，貴州民族出版社，一九八六年，一九八七年。

追悼

一九八五年八月一日～十九日まで，「日中茶文化考察交流団」，団長直江広治先生一行が，福建省を中心に華南文化を訪ねる旅を行った。その後，一行と別れて佐野賢治氏と二人で湖南省に武陵山の茶産地を訪ね，擂茶の習俗に接することが出来たのである。以来，擂茶の由来，分布，日本とのかかわり等追求して来たが，いろいろな制約もあって，思う様に進まなかった。今ようやく，その成果の一端が報告出来る様になったが，団長である直江先生の訃報に接し，この成果をお目にかけることが出来なかったことを心から悔いる次第である。

近々一区切りのご報告の出来ることを霊前に報告し，心からご冥福をお祈りするものである。

一九九四年初秋

松下　智

新刊紹介

陶思炎著

『祈禳・求福・除殃』

中国東南大学助教授陶思炎氏の新著『祈禳・求福・除殃』が，昨年香港で刊行された。本書の構成は「祈禳文化概説」，「農桑祈禳」，「人生祈盼」，「討吉乞巧」，「崇祖祈神」，「駆祟禳凶」，「祛病禳疫」の七章からなっている。「祈禳文化」には人類が幸福を願うことと，禍を避けることの両面を含んでおり，著者はまず第一章において，中国の「祈禳文化」の由来・類型・変容を眺め，さらに二章では，農耕儀礼との関連でさまざまな民間信仰・俗信・タブーをみた。そして，三・四章では人生の通過儀礼・年中行事を観察し，最後には祖先祭祀・死霊・厄払いを視野に入れてまとめられた。

本書は豊富な地方志・民俗資料・史書・先行研究から引用して，大変興味深い問題提起をされたと思われる。なお，この神秘文化叢書の第一輯として，郭淨著『儺：駆鬼・逐疫・酬神』，鄧啓耀著『衣装上的秘境』，楊福泉著『神奇的殉情』も今後刊行される予定である。

（蕭　紅燕）

1993. 4.　三聯書店（香港）有限公司